

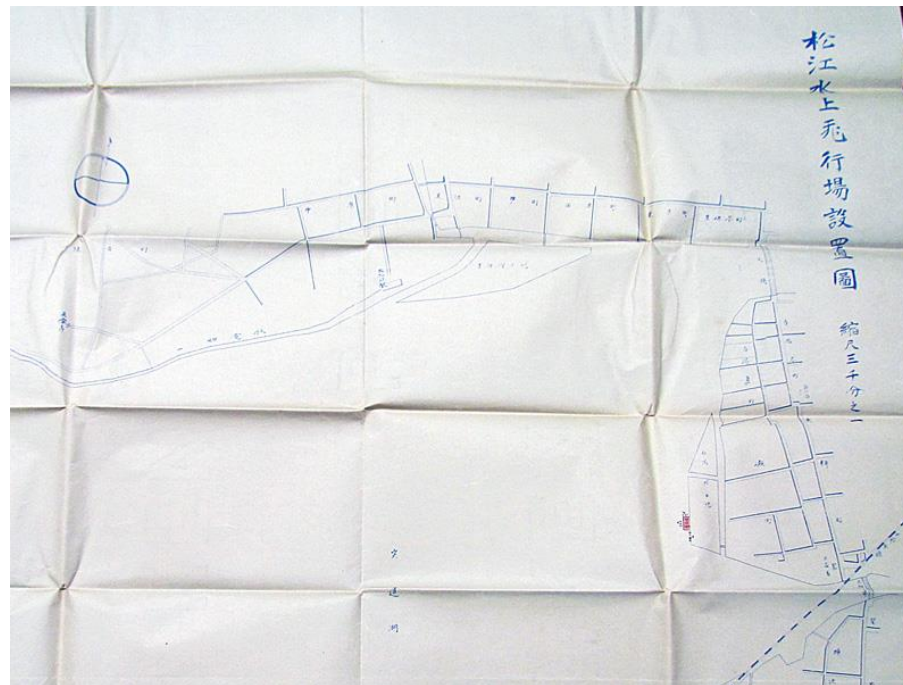
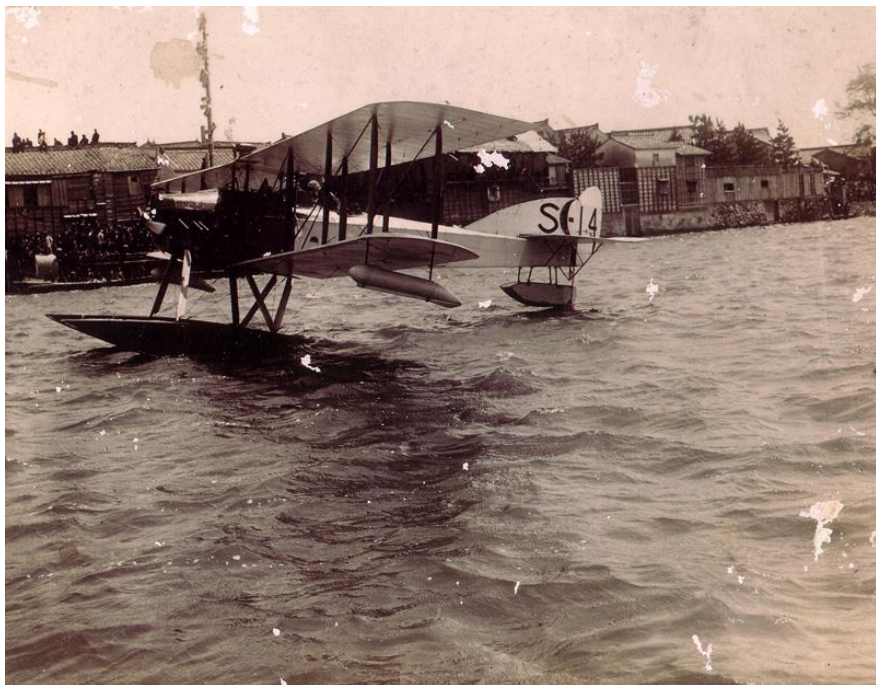
第 78 回 松江の水上飛行機

平成 30 年（2018）6 月、松江の空に新たな飛行機が加わりました。独特のエンジン音に赤い機体、株式会社せとうち SEAPLANES の遊覧水上飛行機です。この水上飛行機では、中海を出発後、宍道湖上空を通過し、平田市から美保関の海岸線にかけてぐるりと回るおよそ 50 分間の旅が楽しめます。空から見る水郷都市・松江と島根半島の山並み、遠くにそびえる大山、そしてキラキラと輝く青い日本海はとても美しいことでしょう。

さて、松江の空を水上飛行機が飛ぶのは、これが初めてではありません。今を遡ること 88 年前の昭和 6 年（1931）10 月 10 日、日本海航空株式会社が城崎—松江間航空路開設のための試験飛行を行いました。日本海航空株式会社の社員 3 名、山陰新聞および大阪毎日新聞記者の計 5 名を乗せて午前 9 時 52 分に城崎を出発した水上飛行機「城崎」号は、午前 11 時 26 分に宍道湖に着水します。宍道湖周辺に集まった数千人の目は、大人も子どもも、期待やあこがれに輝いていたことでしょう。その後、不定期に航空運航していましたが、昭和 8 年 7 月 5 日から一便往復が実施されました。

松江市も航空路開設のために力を注ぎ、宍道湖畔の白潟埋立地（松江市立病院跡地の向かい側あたり）に滑走台建設を計画します。松江市所蔵の公文書「昭和七年飛行場設置」中の、昭和 7 年 4 月 26 日付、松江市長から大阪通信局航空官・佐々木利吉、逓信省航空局・伊勢谷監理課長、新井技術課長に宛てた文書案「飛行機滑走台設置二関スル件」には、滑走台建設にあたり次の様に書かれています。

松江市ハ宍道湖之臨メルヲ以テ水上飛行機ノ発着ニ対シテハ最モ好適ナル地トセラレ……而シテ本市ハ将来本土ト満鮮地方トニ於ケル航空コース主要地トシテ其ノ開拓実現シ期待スルモノニ有之候間……



【写真 1】 松江の水上飛行機（松江歴史館蔵）、【写真 2】 松江水上飛行場設置図（部分）「昭和七年飛行場設置」（松江市蔵）

文書からは、松江市が水上飛行機の発着に最も適した土地であること、また、松江市から満洲・朝鮮地方への航空コースの主要地としての開拓へとつながるのではという期待感を読み取ることができます。

当時の松江市長は石倉俊寛。市営バスやガス事業の創設・湖岸道路の開設など都市基盤整備に尽力し、公会堂の建設、中止にはなりますが神国博覧会開催を計画するなど観光事業にも力を入れていた人物です。もしかすると、航空路開発による都市基盤整備というも視野に入れていたのかもしれませんが。逓信省航空局の許可から滑走台の建設までスムーズに進み、同年 7 月 12 日には松江飛行場の設置にともなう開場式ならびに松江・城崎間定期航空路開通式が行われました。

その後、昭和9年秋には14式改造水上旅客機「松江」号が完成し、昭和10年6月6日からは大阪―松江間を毎週一往復する定期航空便が就航、同年9月15日には松江―隠岐間の第一回定期航空が実施されました。昭和11年10月1日からは日本海航空株式会社にかわり日本航空輸送株式会社が運航を開始することとなり、航空局松江出張所および日本航空輸送株式会社出張所が開設され、白湍埋立地には格納庫・事務所などが建設されます。

新たな航空路の開拓と、航空局や日本航空輸送株式会社の出張所が開設されるなど、広がりを見せた航空事業ですが、昭和12年の支那事変勃発により同年10月、ローカル線の運航が一時停止されることとなったのでした。残念ながら、戦後は主流が陸上機に変わったため、この後再び松江水上飛行場が利用されることはありませんでした。

去年から始まった中海発着のしまねジオフライトは、今後新たな観光スポットとして長く続くことを期待しています。

(史料編纂課／高橋真千子／2019年2月8日記)

【参考文献】

- 『新修松江市史』昭和37年
- 「山陰新聞」昭和6年10月11日、昭和8年7月12日
- 『日本航空史（昭和前期編）』財団法人日本航空協会、昭和50年
- 「昭和七年飛行場設置」松江市